

連載「わたしの福祉論」 ⑦③

## 縁の不思議さ

「縦糸をつむぐ、茗荷村での繋がり」

みょうがむら さんせうえん  
茗荷村 三州園

園長 高城 一哉

私達は、誰もが生命の歴史、人類の歴史を後世に継ぐ担い手としての重要な使命を持って生まれてきている。やがて、伴侶を得て夫婦となつて、子供を授かり、親から育ててもらつたように子育てに勤しみ、生命が生命を伝承する為に、互いにその役割を懸命に果たすように遺伝子に働きかけ、助けられている。

そして、それぞれに使命を果たした後は、年老いて病を患い、やがては、死を迎えるが、それが世の習いというものである。

では、私という生命を継いで来られた縦の糸布とは、一体、どのようなものであつたのだろうか、それこそが、私の遺伝子の総てを成すものなのであるのだと、考えられる。人類史だけを眺めて見ても、五〇〇

万年の永きに渡り生命を継いできているのだから、大変な歩みである。たとえば、父母をとつてみるだけでも、社会的背景の中で辿られてこられた道すがらに、絡められた繋がりの人々だけをとつても、どれだけの多岐に亘るであろうか。

現在、私という人間が生きているという現実を成し遂げる為に、その歴史的な歩みは、いかなるものであつたのか、それに關わる人々や風土、食べられてくださった多くの生命の輩、その一つ一つの縁に由つてしかその存在は在り得ないものである。総てが、私という生命を生かして止まないと、さつてきているのである。

父側の祖父母、そして、それぞれの曾祖父母、その兄弟姉妹と辿れば、日本史や世界史の年代ごとの私の糸布が表現されて、彩やかに浮き上がってくるだろう。第二次世界大戦の頃、大正、明治、江戸、戦国、室町、平安、奈良と、私の先祖はどのようになり、その生を歩まれておられたのだろうか。戦争の時には、敵国の人を殺し、飢餓のひもじさの時は他人の物を奪い取り、自分が生きながらに多くの生命を犠牲にして来た、

まことに浅ましい生命であつた。しかし、それでも、伝承しなければならぬ使命をおびた大切な生命であつて、絶やしてはならないものである。それ故に、他の生命に對しても、その存在の重要さ、尊さを認め、どのような生命に對しても謙虚に接してゆかねばならないのである。茗荷村には、そのような生命が時々訪問されるが、たいしては社会的に弱い立場となつて来られている。Aさんは、20歳代で統合失調症を患い、家庭の事情で以来40年間、社会的入院を余儀なくされた方である。我々は、昔から十年をひと昔と言つて来ているが、そのひと昔を四回も経られていた、まさに今浦島太郎である。彼女の入院中に、父は死亡されていたし、長兄は離婚し、実家は売却されてしまつていた。世間的に言えば、何とも悲惨な状況で、一家離散、路頭に迷う生活である。しかしながら、神様や仏様は、ちゃんと見護つてくださったのであつたのである。いや、それは先祖の御魂様であつたのかもしれない。

その家を購入した相手が、茗荷村で有つた為に、86歳と年老いた母はそのままに住が許され、おまけに入居した村民が介護

までしてくれることとなった。又、長兄は、次の住居が見つかるまで、村で過ごすこととなり、現在は、離婚した妻と子供達とも復縁する不思議に出会っているし、A子さんも、村で引き取ることとなり、不幸のどん底、地獄へ落ちたトタンに、救いの手を差し伸べられたのである。

彼女の縦糸の多くの魂が継がりを強め、横糸に無一物のあわれな彼女を救済してくれる、願ってもない村を探し求められたのであろうか。父母や、長兄が意気盛んであったとすれば、やれ世間体は何だとかで社会的入院は死なねば終わらなかつただろうが、何も彼も失って初めて彼女は自由を得たのである。

人生を諦めていた彼女は、この信じられないほどの幸福に感謝して働き、体調をこわすほどに、良く手伝ってくれている。このように村との縁は、何かしら不思議なものも有って、直接、間接を問わずに現れている。

一方、村で結婚するほとんどの女性は、障がいを持つ人のお世話をするから結婚しないと云っていた人達だが、その献身的な姿に触れた男性にとっては、まるで天使の

ごとき存在となつてゆくのは当然である。やがて二人は、自分たちの世話をする障がいを持つ人を仲立ちとして、自然に互いの必要性を感じて結婚するに到つてゆくようだ。この場合も、この仲介者の障がいを持つ人ももしいなかつたとしたら、彼女の優しさや、内面的な美しさはそこまで發揮されなかつたであらうし、また、彼と結婚する必然性も、生まれ得なかつたに違いない。弱い立場の人を支える温かい心が育つことによつて、共にその長所が一層引き立つたといえる繋がり妙であらうか。

人の幸、不幸、能力の有無、それらは一つのある力が加わることで、働き、継がりの全く異なつたものと変化してゆくことを、先の二つの事例で学んだが、その力こそが愛する努力であらう。愛こそは、人間として人間たらしめるもの、神仏に与えられた偉大なエネルギーだと思われる。相手が弱ければ弱いほどに、その力は強大な働きを為し、与える人の心に、より温かさを増してゆく、何と有難いことではないか。現在A子さんは、同居している集合住宅で家事を手伝い、養育放棄や虐待を受けて心に傷を負っている子供達の、優しいおばあちゃ

ん役をなさつていて、多くの子に救われる日々を過ごされている。

村で結婚した夫婦は、子育てをしながら、もう一人の我が子をと里親となり、親が養育できない子供達を里子として預かり育てているので、どの家庭も大所帯となつてしまつた。

大抵は、六人位の大所帯となつて、ワイワイ、ガヤガヤと騒がしい家庭だが、親子の団欒がほのほのとしていて、子供が親や大人に気を遣うことなく自然に育っているのが良い。

茗荷村、それは何も無い山の中にある唯の村ではあるが、自然の中で自分自身の本来の姿に目覚めることが叶う、ところであるのかも知れない。また、弱い立場の人と、生命や魂の深い所で出会える為に、自分が執われている煩わしさから逃れられる空間とも言えるだろう。生命と生命が、縦にも横にも共に継がり合つていて、和樂しようとして努力している、大自然の調和、私達もその一つとして継がっていたことに気づき感動し、感謝する日々がそこにはある。

合掌